

絵画私論7「挿絵考」 ～バラッドのイラスト制作（3）～

Mutual Relationship between Illustrations and Language through Ballad Poetry - Part 3 -

陣内 敦

Ⅲ 作品 (3)

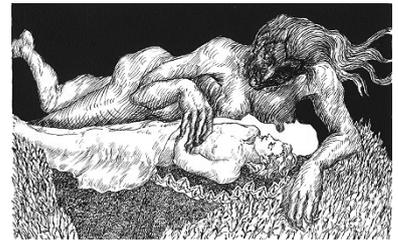
「全訳チャイルド・バラッド第3巻」に収められている109篇から創作した116点の作品を次に紹介する。本作品は、「日本バラッド協会」(URL1)と「やまなかみつよしのバラッドトーク」(URL2)に載せている。挿絵作品のタイトルの前の番号は上記翻訳書の巻と作品番号を、後ろの()内は原典の編者チャイルド(注2)が分類した作品番号と版を示す。なお、「同第1巻」の挿絵作品は2015年の紀要に「絵画私論5」として、「同第2巻」の挿絵作品は2016年の紀要に「絵画私論6」として掲載している。これによって日本バラッド協会から依頼を受けた伝承バラッド(注1)306篇の挿絵319点を完成させ、ここに掲載する。



Ⅲ・1 少年とマント (029-)



Ⅲ・2 サー・ガウェインの結婚 (031-)



Ⅲ・3 ヘンリー王 (032-)



Ⅲ・4 若者エティン (041A)



Ⅲ・5 ジョン王と大司教 (045A)



Ⅲ・6 ウェダバーン船長の求婚 (046A)



Ⅲ・7 若者アンドルー (048-)



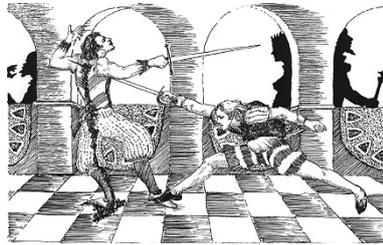
Ⅲ・8 王女ジーン (052A)



Ⅲ・9 若者ピーカン (053A)



Ⅲ・10 カラスと鶴 (055-)



Ⅲ・11 サー・アルディングー (059B)



Ⅲ・12 エストミア王 (060-)



Ⅲ・13 サー・コーライン (061-)



Ⅲ・14 チャイルド・ウォーターズ (063A)



Ⅲ・15 きれいなジャネット (064A)



Ⅲ・16 イングラム卿と若者ワイアット (066A)



Ⅲ・17 グラスジュリアン (067A)



Ⅲ・18 ブラウン・ロビン (097A)



III・19 ブラウン・アダム (098A)



III・20 ジョニー・スコット (099A)



III・21 ウィンズベリーのウィリー (100A)



III・22 ダグラスデイルのウィリー (101A)



III・23 ウィリーとリチャード伯の娘 (102A)



III・24 赤いバラと白いゆり (103A)



III・25 異教の騎士 (104A)



III・26 ウィル・スチュアートとジョン (107A)



III・27 クリストファー・ホワイト (108-)



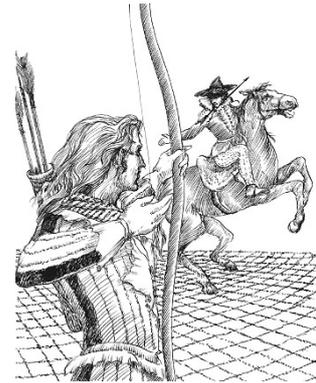
III・28 ロビン・フットの武勲_1 (117-)



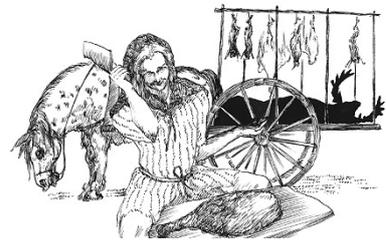
III・28 ロビン・フットの武勲_2 (117-)



III・28 ロビン・フットの武勲_3 (117-)



III・28 ロビン・フットの武勲_4 (117-) III・28 ロビン・フットの武勲_5 (117-) III・28 ロビン・フットの武勲_6 (117-)



III・28 ロビン・フットの武勲_7 (117-) III・28 ロビン・フットの武勲_8 (117-) III・29 ロビン・フットと肉屋 (122B)



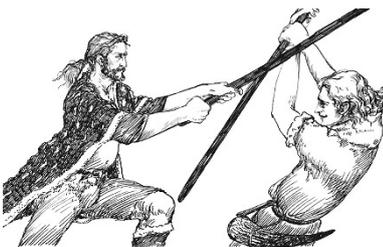
III・30 ロビン・フットと短衣の修道士 (123B)



III・31 ウェイクフィールドの陽気な家畜番 (124A)



III・32 ロビン・フットとリトル・ジョン (125-)



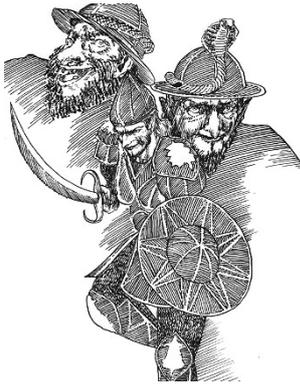
III・33 ロビン・フットと皮なめし屋 (126-)



III・34 ロビン・フットと鋳掛け屋 (127-)



III・35 新生ロビン・フット (128-)



Ⅲ・36 ロビン・フットとアラゴンの王子 (129-)



Ⅲ・37 ロビン・フットとスコットランド人 (130B)



Ⅲ・38 ロビン・フットと御猟林番 (131-)



Ⅲ・39 勇敢な行商人とロビン・フット (132-)



Ⅲ・40 ロビン・フットと乞食その一 (133-)



Ⅲ・41 ロビン・フットと乞食その二 (134-)



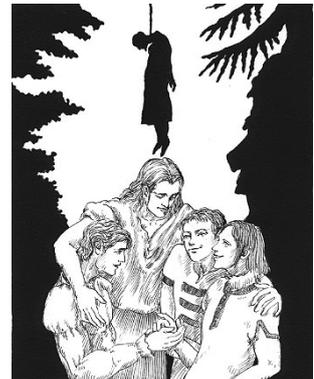
Ⅲ・42 ロビン・フットと羊飼 (135-) Ⅲ・43 ロビン・フットの喜び (136-) Ⅲ・44 ロビン・フットと行商人 (137-)



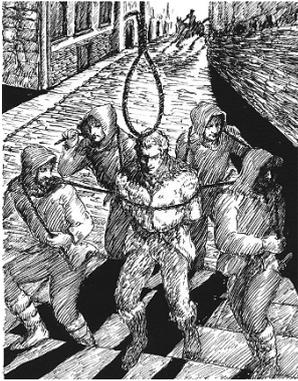
Ⅲ・45 ロビン・フットとアレン・ア・ディル (138-)



Ⅲ・46 ロビン・フットのノッテンガム行き (139-)



Ⅲ・47 三人の小姓を救出したロビン・フット (140B)



Ⅲ・48 ロビン・フットの
ウィルスタントリー救出 (141-)



Ⅲ・49 リトル・ジョンの物乞い (142B)



Ⅲ・50 ロビン・フット追跡 (146-)



Ⅲ・51 ロビン・フットの誕生と
教育と武勇と結婚 (149-)



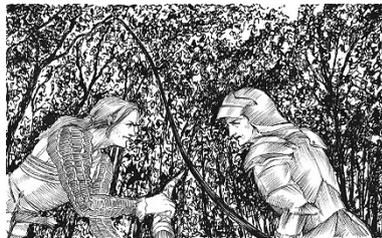
Ⅲ・52 ロビン・フットとマリアン
(150-)



Ⅲ・53 変装した国王と
ロビン・フットの友情 (151-)



Ⅲ・54 ロビン・フットと金の矢 (152-)



Ⅲ・55 ロビン・フットと勇敢な騎士
(153-)



Ⅲ・56 ロビン・フットの真実の物語
(154)



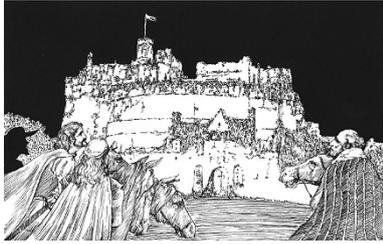
Ⅲ・57 ボズウェル伯 (174-)



Ⅲ・58 北部反乱 (175-)



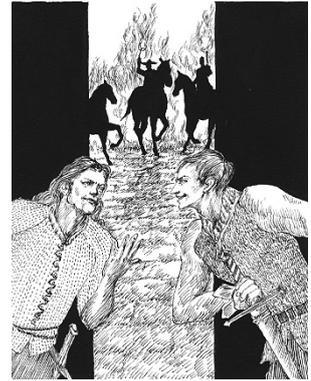
Ⅲ・59 ウェストモアランド伯爵 (177-)



III・60 ジェイムズ王とブラウン (180-)



III・61 ロウギー卿 (182A)



III・62 ジェイムズ・グラント (197-)



III・63 ジョン・シートン (198A)



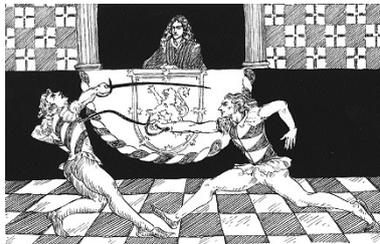
III・64 フィリップホーの戦い (202-)



III・65 ジェイミー・ダグラス (204A)



III・66 ボズウェル橋 (206-)



III・67 デラメア卿 (207A)



III・68 ダーウェントウォーター卿 (208A)



III・69 ボニー・ジェイムズ・キャンベル (210C)



III・70 アソール公爵の乳母 (212B)



III・71 サー・ジェイムズ (213)



Ⅲ・72 庭師 (219A)



Ⅲ・73 アンゲルシーの美しい娘 (220A)



Ⅲ・74 キャサリン・ジャフレイ (221A)



Ⅲ・75 ベイビー・リビングストーン (222A)



Ⅲ・76 エッピー・モリー (223)



Ⅲ・77 アンゴスクの貴婦人 (224)



Ⅲ・78 ロブ・ロイ (225A)



Ⅲ・79 リズィ・リンズィ (226B)



Ⅲ・80 クロフォード伯 (229A)



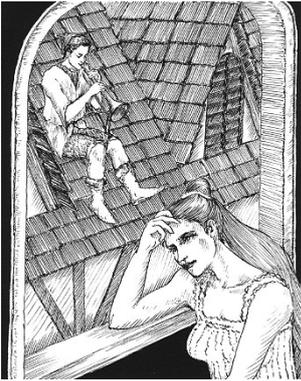
Ⅲ・81 メラースティンの地主の殺害 (230)



Ⅲ・82 エロール伯爵 (231A)



Ⅲ・83 リッチー・ストーリー (232A)



Ⅲ・84 アンドルー・ラミー (233A)



Ⅲ・85 アポイン伯爵 (235A)



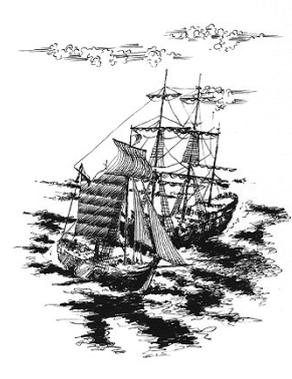
Ⅲ・86 ドラムの地主 (236A)



Ⅲ・87 リーズデイルと賢明な
ウィリアム (246A)



Ⅲ・88 灰色の雄鶏 (248-)



Ⅲ・89 ヘンリー・マーティン (250A)



Ⅲ・90 のっほのジョニー・モア
(251-)



Ⅲ・91 台所番 (252A)



Ⅲ・92 ヨンダーデイルのトマス
(253-)



Ⅲ・93 ロード・ウィリアムあるいは
ロード・ランディ (254A)



Ⅲ・94 命がけのウィリーの夜這い
(255-)



Ⅲ・95 アリソンとウィリー (256-)



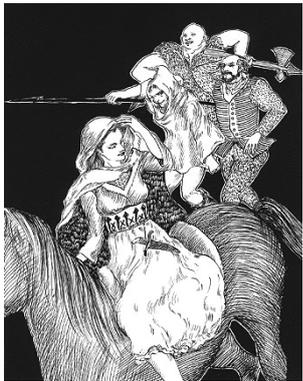
Ⅲ・96 イザベルとパトリック伯爵 (257B)



Ⅲ・97 プロテーティ城 (258-)



Ⅲ・98 トマス・スチュアート侯爵 (259-)



Ⅲ・99 トマスとマーガレット (260A)



Ⅲ・100 イザベル (261-)



Ⅲ・101 ロード・リビングストン (262-)



Ⅲ・102 殺された騎士 (263-)



Ⅲ・103 白い魚 (264-)



Ⅲ・104 騎士の幽霊 (265-)



Ⅲ・105 ローン侯爵と嘘つき執事 (271B)



Ⅲ・106 追剥ジョックと陽気な行商人 (282-)



Ⅲ・107 神聖な尼僧院 (303-)



III・108 若者ロナルド (304)



III・109 アウトロー・マリ (305A)

IV おわりに

本著の連載「絵画私論4」のIはじめにのところで、マザー・グースの挿絵制作から始まって絵画と言語の繋がりや広がりについて考察する機会を得たと述べた。しかし、正しくは絵画と“文学”の繋がりである。絵画には基より言語性が備わっており、視覚言語と呼ばれ図像によって伝える伝達形態となっている。この絵画と言語もしくは文学の関係性については、「絵画私論4」の中で考察をおこなっている。絵画に題名を付ける慣習や、イラストレーション (illustration) という言葉は図や絵による解説を語源としていることなど、この二つは主従の役割を変えながら、その関係を密接にしてきた。さらに絵画と文学は、表現をはっきりと分かつのではなく、お互いに惹かれ合い繋がって存在してきた。文学が絵画に惹かれているものと、絵画が文学に惹かれているものは、それぞれに欠けているものではなく、それぞれに同じ周波を放つものが存在し共鳴しているのではないかと考える。

絵画も文学もそれぞれの言語によって表そうとする主題がある。それは絵や物語のタイトルのことではなく、伝えようとする内容の核心である。絵画の作家も文学の作家もこの伝達内容の核心を一言でまとめることはしない。あえて見る人や読む人の想像の余地を残しているのか、作家が生み出した絵画作品や文学作品にはすでに作家個人がまとめることのできない生命を宿しているとしているのか、いずれにしても限定された言語で括られることはない。またそれぞれに対する論評においても、誠意あるものは結論付けた言い回しはしない。この絵画や文学の主題が簡単に言葉で捉えられない理由は難解であるが、このことが絵画と文学が惹かれ合い繋がってきた理由と同一のものであると考えられる。

これについて筆者は、「抽象性」と「想像性」がもたらす共鳴作用ではないかと考えた。まず「抽象性」とは、文字通り具体的ではないものであるが、そこに現われるものは象徴的な形象・事象である場合と、細部のディテールを削り取った総合的・総称的な形象・事象の場合である。「想像性」とは、読み取った内容から連想し、あるいは空想して作られる形象・事象である。この「抽象性」と「想像性」に共通することは、有限の言語で括られることのない中心の空洞である。この中心の空洞から発する周波は豊かな感性を持った人間の心を震わせ、絵画と文学の二つを呼び合わせていくのではないだろうか。

筆者は約4年間、マザー・グースとチャイルド・バラッドの挿絵制作をおこなってきた。ここで感じたことは、抽象性を包有した第一級の文学に挿絵を付ける時、これを説明しうる範囲は一部であって、それは一瞬の陽炎のように文学の抽象性の中に消えていく形象であるということであった。この感覚は挿絵の説明的な限界点を悲観的に表しているのではなく、むしろ文学の抽象性を損なうことなく、さらに想像性を響かせる媒体として役割を果たしているのではないかという楽観的な感覚である。

今後、筆者はまた文学に付随しない表現形態に戻っていく。この4年間が自身の絵画制作の道程にどのような影響を与えたのかという自問がある。「心に湧き上った主題の中に抽象性と想像性を注ぎ込むこと」、この指標を自身の画業に意識づけることができたと自答し、本著のまとめとしたい。

最後に、制作に関して多大なご助言をいただいた日本バラッド協会の山中光義氏ならびに中島久代氏に衷心より感謝を申し上げたい。

(参考文献)

1 バラッド研究会編訳、藪下卓郎・山中光義・中島久代監修『全訳チャイルド・バラッド』全3巻 音羽書房鶴見書店、2005年-2006年

(注)

- 1 「バラッド」とは中世以来ヨーロッパ各地で吟遊詩人や民衆によってつくられ、口承伝承として世代から世代へとついでに継がれてきた物語歌をさす。語源はラテン語で舞踏を意味する「バラレ」である。神々の系譜や民族英雄の事蹟をうたう叙事詩になぞらえ、民衆の叙事詩ともよばれる。15世紀後半の印刷術の発明によって純粋な口承物語歌とは異なる「ブロードサイドバラッド」が生まれ、16世紀から18世紀に大流行した。大判紙ブロード・シートにニュースや事件を題材とした歌が印刷され、路上でうたわれ売られた。口承のバラッドがブロードサイドとして売られたり、逆にブロードサイドが口承化したりと両者の交流は錯綜しており、通常は両方まとめて「伝承バラッド」とよぶ。(『イギリス文化事典』イギリス文化事典編集委員会、丸善出版、2014年、第13章「バラッド-現代に継承される文化遺産」[中島久代執筆]より)
- 2 チャイルド (Francis James Child) は1825～96年を生きた人であり、詩集『英蘇バラッド集』(The English and Scottish Popular Ballads)を編むのにハーヴァード大学教授としての約40年をかけた。(『全訳チャイルド・バラッド第1巻』バラッド研究会編訳、藪下卓郎・山中光義監修、音羽書房鶴見書店、2005年、「チャイルドの世界～まえがきに代えて」[藪下卓郎執筆]より)

(URL)

- 1 「日本バラッド協会」<http://j-ballad.com/>
- 2 「魅惑の物語世界 やまなかみつよしのバラッドトーク」<http://www.balladtalk.com/>

長崎短期大学研究倫理委員会承認【第1803号】